

社会とのコミュニケーションに力を入れ、 土木のイメージアップと技術者の気概の向上に 努めたい。

御巫 清泰

MIKANAGI Kiyoyasu
土木学会第91代会長



聞き手 本誌学生編集委員：

水谷香織 鈴木崇之 野田昭子
アマティア・シャイレンドラ 橋本紳一郎 磯部公一
2003年6月9日 [月]・土木学会 役員会議室にて

関西国際空港の社長（現在は、同社顧問）を兼務ということで、最初は学会長との両立に危惧を感じていたといいますが、こうした厳しい時に必要とされているのならと就任を決断しました。社会とのコミュニケーションに力を入れ、土木のイメージアップを図り、技術者の気概を高めていきたいという新会長としての抱負を、学生編集委員がインタビューしました。

地震被害の調査団派遣など 学会としてできることは沢山ある

鈴木 個人会員4万人以上、法人会員700以上のマンモス学会のトップに立つ気分はいかがですか。

御巫 非常に緊張しています。1年ほど前に、会長になるようにといわれ、心の準備はしてきたつもりですが、やはりいざなってみると、それだけの責任があるわけですから、緊張感はありますね。

水谷 とても重要な会長という役割を担うことを決断した理由は何ですか。

御巫 正直に言えば、決断したくはなかったですね（笑）。しかし、私の周辺にいるさまざまな土木の仲間たちから、推されるのならなるべきではないか、何で嫌がっているのか、と逆に言われて、決断しました。

鈴木 土木学会の会長の任期は1年ですが、短いとお感じにはなりませんか。

御巫 実は会長の就任する前に、1年間次期会長という任期があります。次期会長というのはいわば見習いみたいなもので、会長の出る会議などには必ず一緒に

出ます。そのことによって、どのように会議が運営され、どんな仕事が進行中か、肌身で感じられます。そういう1年を経ていることで、継続性を持って処理できるのです。ですから次期会長のときから考えれば、全体としてはつながりがとれ、いい仕組みになっていると思います。

鈴木 会長になられて、これから特に力を入れていきたいものはありますか。

御巫 社会とのコミュニケーションですね。具体的に言えば、最近、土木業界や学会のイメージは、マイナスイメージで語られることが多くなっています。それをできる限りプラスのイメージが多くなるようにしたいということです。

例えば、5月26日に東北地方で発生した強い地震の被害に対して、土木学会ではいち早く調査団を派遣しました。そのこと自体素晴らしいことですが、それがテレビを通じて何回も放映されました。社会とのコミュニケーションということでは、こうしたことが大事だと思っています。プラスのイメージを積み重ねることによって、土木学会のイメージも向上していくので



左から
鈴木崇之,
SUZUKI Takayuki,
橋本伸一,
HASHIMOTO Shinichi,
アマティア・シャイレンドラ
AMATYA Shailendra
の各学生編集委員

はないでしょうか。また、それは結局、若い皆さんのような土木技術者が、将来気概をもって仕事をしていくことにもつながるだろうと思っています。

水谷 土木学会のイメージアップということですね。学会としてCM などにお金を使うことはできるのでしょうか。

御巫 新聞全面に意見広告を1回載せるだけでも何千万円もかかってしまいます。企業も同じですが、お金の余裕があればできますが、会費で成り立っている学会で、それだけの費用を捻出するのは、現実的に難しいのではないのでしょうか。それよりも、先ほどの地震被害調査団の派遣のようなことで、お金を使わずにできることも沢山あると思います。例えば、関西国際空港では、定例の記者会見を行ったり、インタビューにいつでも受けるようにしたり、新聞の論説委員に担当役員をつけて、情報を提供し意見交換をしています。あるいは、小学校に出張授業に行き、授業が終わったあとは空港の見学に連れて行ったりもしています。自分たちの日常業務の範囲内でボランティア的に行える活動をしているのです。工夫はいろいろあると思いま

す。実際に、支部のレベルでもイベントを開くなど、さまざまな取り組みを行っていますね。

社会のニーズにいか 的確に応えていくか

野田 これからの土木にとって、必要なことは何だと思えますか。

御巫 社会のニーズに、いかに的確に応えるかということではないでしょうか。ライフサイクル全体で安くつくるといってもひとつです。日本の都市の整備レベルは、世界で見るとまだまだお粗末です。自分たちの住んでいる都市は、環境にもいいし、豊かで美しい。そういうものを、100年200年かけてじっくり作りあげていくべきだと思います。

アマティア 私たちのような海外の留学生に対して、JSCE がもっとできることはないのでしょうか。

御巫 もちろん、学会が国際的にもっと幅広くコミュニケーションして、一緒に技術や学問の発展、社会資本の方向性を見出していけるようになることが望ましいのは確かです。土木学会でもこの1年、各国の土木学会

交流



左から
水谷香織,
MIZUTANI Kaori,
野田昭子,
NODA Akiko,
磯部公一
ISOBE Koichi
の各学生編集委員

と協定を結んだり、一緒になって仕事をしたり多くの取組みを行ってきました。そういう方向をもっと拡大していきたいとは思っています。

橋本 学生でも学術講演会で発表をするためだけに会員になる人がいます。また、土木に就職をするにもかかわらず、大学を卒業すると、退会してしまう人が多くいます。

御巫 土木技術者で学会員でない人の比率をどうしたら上げられるかということですが、退会してしまうのは、会費が高いとか、入っても自分の仕事の役に立たないということがあるのではないのでしょうか。会費が高くても、自分の仕事に役立つのなら、入るでしょう。しかし、それはその人その人の置かれている立場がありますから、学会としては強く勧めることはできません。

せっかく育てた海外の留学生が退会してしまうという問題も聞いていますが、そのことについては、もっと英文のものを増やすとか、特例的に会費を下げるとか、それぞれ考えられることはあると思っています。

土木を広くとらえる

磯部 僕たちはいま学生という立場にいますが、僕の周りでも就職活動で土木へ行く人が減ってきているように感じられます。今後の土木に希望や魅力を感じていないという表れだと思います。会長から学生に希望をもてるようなアドバイスをいただけますか。

御巫 私自身のことをいえば、私は土木を卒業し、運輸省に入って、港湾を専門に最初の10年を過ごしました。それがある時方向が変わり、経済企画庁に出向になって、社会資本担当の計画官として、経済計画をつくることになりました。10人の計画官の中で、技術屋は私ともう1人だけ。230兆円という予算を、道路や公園、空港など、どこにどんな比率で投資するのがいいのか、社会資本整備の方向性を決めました。その後は国土庁へ行き、最後は関西国際空港の社長になりました。私が本来希望していた港湾のスペシャリストとしての道からは離れてしまったわけです。

このような経験から、私は、土木技術者あるいは土木を志そうという人たちは、自分の専門分野だけではなく、他の分野や総合的な分野でも力を発揮できる適応力が必要だと思っています。土木を広くとらえ、自分の伸びていく先を考えると、未来は限りなく広がると思いますよ。

最後に社会資本整備の将来が、昔のように右肩上がりに伸びない先行き不透明な時代であってこそ、土木技術者として巣立とうという皆さんには、ぜひ気概と、使命感を持ってあたって欲しいと思います。

水谷 本日のように、会長をはじめ先輩方の気概に触れることが、何より若手技術者の気概に繋がるものと思います。これからの1年とても期待しています。本当にありがとうございました。



写真 会長を囲んで